

底が突き抜けた」時代の歩き方 486

「働くということ」に絶望しているニート

日本で親と同居する成人の未婚者は約1200万人。そのうち、基本的な生活を親に依存する「パラサイト・シングル」は500万人以上といわれる。そして『国民生活白書』（内閣府）によれば、01年現在のフリーター（15歳～35歳未満）人口が417万人で、学生や主婦を除く若者のうち、5人に1人を占める。正社員ではなく契約社員、パート、アルバイトなど不安定な職に就くフリーターは、2010年には476万人になるというUFJ総研の試算もあり、近い将来、同年代の正社員との比率は1対1になるという推計もなされている。他方、学校に行かず、働きもせず、職探しも放棄しているニートは、15歳以上35歳未満では60万人～80万人くらい。15歳～25歳未満に限れば40万人といわれる。ひきこもりについては自己申告で41万世帯であり、斎藤環によれば「ひきこもり百万人説」が現実化してきている。

フリーターは当初、「働く意欲」を喪失した若者とみなされてきたが、近年の雇用状況の激変のなかで、正社員に「ならない」のではなく「なれない」という側面が大きく浮かび上がってきている。ところが、働く気のないニートはかつてのフリーターと同様、「本人の甘え」の一言で片付けられているのが現状である。フリーターについて、ようやく正社員になりたくても「なれない」若者であることに気づいたのであれば、ニートについても「働かない」のではなく、働きたくても「働けない」若者であることへのまなざしが必要になってくるであろう。ひきこもりだって、好きでひきこもっているのではなく、外に出たくとも「出れない」者たちではなかったか。若者たちにみられるさまざまな奇態な現象について「若者の甘え」で切って捨てることは、成熟社会がどれほど若者たちの成熟を遮ってきているかに対して無知と盲目を広言しているに等しい。

正社員になりたくても「なれない」フリーター、働きたくても「働けない」ニート、外に出たくても「出れない」ひきこもり、というようにみていくと、すべて「どこかに行けそうで、どこにも行けない」我々の分身であるような気がする。おそらくネット心中にしても、生きたくないから見知らぬ者同士で死ぬのではなく、生きたいのに「生きられない」絶望感を共有し合って一緒に死ぬのだと思われる。生きるのが嫌になってリストカットするのではなく、生きる実感を得るためにリストカットするのとどこかでつながっているのではないだろうか。つまり、フリーターにしてもニートにしても、ひきこもりにしても、またリストカットにしても、すべて自己否定的な自傷行為にみえるとしても、その裏面では「生きたいからこそ」必死にしがみついている若者たちの苦しみが感じられる。

そうしたいのに、裏腹なかたちであらわれてしまうのは、一種の「リアリティーの倒錯」にほかならないが、個人の成熟を抑圧する成熟社会は、「リアリティーの倒錯」によって成り立っている社会であることは間違いない。我々は「死ぬために生きている」という気がしないでもないが、「リアリティーの倒錯」はそれを引っくり返して、一気に「生きるために死ぬ」衝動に駆られているような感じがしてならない。「リアリティーの倒錯」を生みだしているのが成熟社会であるなら、成熟社会こそが正社員になりたくても「なれない」現実を生みだしていることによって、若者はフリーターとして出現せざるをえないし、働きたくても「働けない」現実を生みだしていることによって、若者はニートとして出現せざるをえないのだ。同様に、家の中にひきこもるしかない現実を成熟社会が生みだしていることによって、若者はひきこもりとして出現せざるをえなくなっている。

『ニート フリーターでもなく失業者でもなく』（共著）のなかで、東大の玄田有史助教授はニートについて、働くことや学校に行くという外の世界、未知の世界に出て行くことに「希望」を持てなくなった若者、と定義し直し、《ニートが増えていくことを歓迎できないのは、それが未知との出会いを失った若者が歯止めなく増え続けている結果だからだ》という。しかし、そうだろうか。働くことや学校に行くことは「外の世界」であり、「未知の世界」なのであろうか。職場や学校は「外の世界」でもなければ、「未知の世界」でもない。学校については小・中（・高校）を通じてどんなところであるかがすでにわかっているし、職場についても自分は働いていなくても、親や友人や情報を通じてどんなところであるかはおよそわかっている。出て行きたくなるほどの「外の世界」でもなければ、「未知の世界」でもありえないことを彼らは見切っているにちがいない。

働くことや学校に行くことが「外の世界」でもなく、「未知の世界」でももはやありえないことに、彼らは絶望しているような気がする。働くことや学校に行くことを「外の世界」や「未知の世界」とみなす水準に、彼らはすでに立っていない。彼らの絶望は、働くことや学校に行くことをつまらなく感じているほどに深いと思われる。ニートを「未知との出会いを失った若者」と定義することに異議は唱えないが、働くことや学校に行くことを「未知との出会い」とみなす発想を前提にするかぎり、ニートの「孤独」は捉えられないだろう。ニートが「働く希望」をもてなくなっているのは、職場のなかに「働く希望」が存在しなくなっているからである。少なくとも彼らにはそう映っている。働くことや職場に「希望」が充満しているのに、彼らはその「希望」に触れようとしていないということではけっしてない。働くことにも職場にも「希望」なるものは皆無であることが感じられているからこそ、彼らの足は一步を踏みだせなくなっているのではないか。

とはいえ、多くの若者がそうであるように、ニートだって、働くことに「希望」がなくても、つまらないと感じていたとしても、働かなくてはならないという焦燥感に駆ら

れていることは間違いない。けれども、働くことに一步がどうしても踏みだせないのだ。どうして踏みだせないのか。ニートは未知の世界に出て行くことに「希望」を持てなくなったからではない。逆にいえば、ニートではない若者たちが「働くこと」ができてるのは、未知の世界に出て行くことに「希望」を持っているからだろうか。おそらくそうではあるまい。働くことが未知の世界だと思っていなくても、また働くことに「希望」を感じていなくても、多くの若者はニートにもならず働いていると思われる。働くことは働くことであって、それ以上でもそれ以下でもありえないから、未知の世界でもなければ、そこに未知との出会いがある筈もないということは、きっちりと押さえておかななくてはならない。

今はもとより、以前も働くことが「希望」であったためしはない。ただ成熟社会以前の貧困社会では、働くことがいかに辛かろうとも、働くことを土台にして異性を見出し、「豊かな家族生活」を築くという目標に近づこうとする点で、「希望」があったことははっきりしている。したがって、ニートなる若者が生みだされてくる余地はそこにはなかった。しかし、「豊かな家族生活」を築くという目標が一応達成されたかにみえる成熟社会にあって、子供たる若者にとっては「豊かな家族生活」というものがどれほど空虚であるかは身に沁みていたし、かつての目標に取って代わるめざすべき目標はみえないままであった。働くことが異性との交流を果たす土台となりうるというかつての発想も、確定的なものではありえなくなっていた。結婚するということが自明ではありえなくなったように、働くということも自明ではありえなくなったのだ。成熟社会はそれまでの確固としていた世界の輪郭を大きく揺り動かしてしまったのである。

ニートについて調査している玄田氏は『婦人公論 井戸端会議』(04・9・7)で、いくつかの特徴を次のように列挙する。

ニートのなかにはひきこもっている人もいるが、『ひきこもり』には定義があって、半年以上、自宅以外のところに行けない、家族以外の人とコミュニケーションをとれない、そのなかでも統合失調症などの精神疾患ではない人たちを指す。ニートのなかでは、一角にすぎないんです。」

職探しの「質問をニート当人にすると、『いや、いまはちょっと』と答える。『いつからやるの?』と尋ねても、『明日からやりますよ』と。でも、その明日がなかなかこない。」「新聞によっては、『働く意欲のない若者』という書き方をすることがある。けれどそれは違う。実際に『働きたくない』と言っているニートはきわめて少数派。働くことに対して全然関心がなくて、なおかつ『親に食べさせてもらって、何が悪いの?』と開き直っている子たちなんてほとんどいない。」「結果的に働いていないから、親に食べさせてもらうしかないだけです。ただ、裕福な家だから子どもが働かない、働かなくてもいいというケースだけじゃない。」「ひきこもりも、親が死んだときに立ち直るケースがある。ニート全体は、毎日が「このままでいいのか」という非常な焦りの連続。決して安穏とした感じじゃないんです。」

ニートは男女半々で、「中卒、高校中退もたくさんいますが、大卒も多い。」

ニートの4割ぐらいは就職活動を一度もしたことがなく、「知らない人と一緒にの空気を吸って生きていくことに、まったく慣れていないから、恐怖感が強いんですよ。」

フリーターからニートになるだけでなく、「正社員を辞めててニートになる場合だってあります。人づきあいがしんどくて、やっていられなくなったりする。」「最近の若い人は、人間関係をきれいにしてお辞めすることが重要みたい。できれば、人間関係が最悪になってから辞めるのは避けたい、と。」「いまの子はかなり早い段階で働く意味を問うんです。われわれが10代のときにそんなことを考えました？」

同じ座談に加わっているNPO法人キーパーソン代表理事朝山あつこも、こう指摘する。「私なりにニートの状況を考えると、泳げない、あるいは泳ぎ方を教えてもらっていない子どもを海辺に連れて行って、いきなり『泳げ』と言っていることと似ていると思うんです。泳げない子は、泳ぐことが怖いと知っているから、泳ごうとしないでしょう。」「泳げない子は、泳ぐのが怖いから引き下がるしかない。だんだん海から遠ざかっていく。」「それから、もう一つ大きな問題なんです、泳がないですむ状況が用意されている。つまり、親が『〇〇ちゃん、泳がなくていいのよ。危ないんだから。荒波があるから溺れるかもしれないし』と言ってしまう。

子どもに大変な思いをさせてまで働かせる必要はないと、思っている親も少なからずいる。『無理をしなくても、うちで好きなことをやっていいの』と。子どももそういうことが許される状況であれば、『じゃ、泳ぐのはやめて、うちで好きなことをやっていようかな』と思っても不思議ではない。」

「でもいまは、親から離れたいと思わないんですよ。たとえば、うちの長男に、『地方の大学に行けば？』と言ったら、『自分の部屋があって、ご飯が出てきて、洗濯もしてもらえるのに、何が悲しくて地方に行かなきゃいけないの？』と答える。うちの子が少し怠け者だからそう言うのかなと思ったら、それは非常に一般的なんですね。」

「僕がショックだったのは、子どもたちから本気で『世の中には答えのないことってあるんですね』と言われたとき。『答えって、一つじゃないんですね。わからないってことも、別に悪くないんですね』と言うんです。」(玄田)「いまの子どもは正解を求めたがりますね。正解を出さなければいけないと思っている。」(朝山)「『ニートは思考が硬い』と言う人もいます。白か黒かはっきり結論をつけたがるんですね。」(玄田)

ニートが出現してきた原因について、玄田氏は「決定的な原因はわからない」といいながら、「三つぐらいの要因」を挙げる。

「一つは不況の影響。面接で落ちて、落ちて、落ちまくと、だんだん『自分は社会で必要とされていない』と思うようになるからね。大人は『若いやつは意識が弱い』と言うけれど、いまの状況でタフであり続けるのは大変なことです。

二つ目は、ゆとり教育・個性教育の影響。こうした教育は『自分のやりたいことをやっていいんだよ』と言ってしまふ。さっきの泳ぎの喩えで言えば、『クロールでも平泳

ぎでも、どんな泳ぎ方をしてもいいから向こう岸まで泳いでね。自己責任で』と言う。だけど、どういう泳ぎ方をすればいいか習っていない状況で、そう言われても困る。

しかも、大人はそう語ることをいいことだと思っている。『私は子どもたちに理解がある』とさえ思っている。もちろん、やりたいことが見つかって、それができるのは有利な生き方だし、とってもいいこと。だけどその裏には、『やりたいことを見つけられないのは不幸だ』といったニュアンスが付いてまわる。つまり、社会全体が子どもたちに対して、自己実現や自己責任といったプレッシャーをかけ過ぎているんです。結局、見つけられないで社会に出ると、『自分は敗者だ』『もうだめだ』と思ってしまう。」

「でも実際、僕たちの周囲を見ても、やりたいことがないと絶望するかといったら、決してそうではない。だから、『やりたいことがある人は幸せだけど、やりたいことがないからといって決して不幸ではない』と強調する必要がある。

（中略）でも子どもたちが本当に知りたいのは、どのようにしてやりたいことを見つけたのか、やりたいことがなかったときどうもがいて生きてきたのか。それに対して、親はまったく語る事ができていない。」

「三つ目は、いまの子どもには、親でもない、先生でもない、知らない大人と交わるという経験が決定的に欠けている。極端な話、挨拶をまったくできない子がいるよ。そういう子どもたちは、社会へ出るときものすごい恐怖感がある。カナヅチの状態で、『泳げ』と言われていたんだから。」

以上、三つの要因が提出されているが、「不況の影響」という最初の要因については、司会の田丸美寿々が、「一方で、若者をめぐる労働の話を見ると、『日本経済はどうなっちゃうの』と思う大人も多いと思うんです。今年3月にUFJ総合研究所が出した『フリーター人口の長期予測とその経済的影響の試算』という報告書によると、フリーターが正社員になれないことによって生じる経済的損失は、消費額が8.8兆円、税収が1.2兆円減となっています」と話を向けると、玄田氏はこう答える。

「でもね、『日本経済のために働いてほしい』とか、『社会保障制度、年金制度が維持できなくなるから働いてほしい』とニートに言うのは、最悪ですよ！たとえば女性に、『少子化が進んでいるから、出生率を引き上げるために子どもを産んでほしい』というぐらいいつ、つまらない説明の仕方で『そんなこと、私には関係ない』と言われるのは当然です。

フリーターやニートの解決も、しっかりとしたマクロ経済政策を採れば、いい方向には進むんです。だけどいまは不況に加えて、定年を65歳まで延長しようとしている。そういう構造が変わらないかぎり、彼らを取り巻く状況も同じでしょう。」

「つまり、中高年がどんどん辞めてくれれば、若い人が正社員として働く機会も増えてくると？」(田丸)「現在も若い人にとって不利な状態で、社会構造が維持されてきています。それが変わらないと。」(玄田)

二番目の要因である「ゆとり教育・個性教育の影響」について、「自分のやりたいことをやっていいんだよ」という教育が、子どもたちの「やりたいこと」を見出したり、

創造していく方向に手を貸さずに放任しているために、「やりたいこと」がわからないまま落ち込んでいくといったことが指摘されている。そこでニートを「泳げない子」の譬えを用いて説明するが、ニートは世の中を「泳げない子」なのであろうか。田丸美寿々が「働くことは、歩くことと同じようにごく当然のことと考えてい」たというように、働くことは自然であったが、泳げることは自然ではなく、泳げるコツを会得しなければならなかった。働くこともいまや、泳ぐことと同様にコツを会得しなければならなくなったのだろうか。いや、昔も今も泳ぐにはコツが要るが、働くことにはコツは要らない。したがって、ニートを「泳げない子」に擬するには異和を感じるが、ニートが「泳げない子」と同じような状態に陥ってしまっていることは頷ける。働くことは泳ぐこととは異なるにもかかわらず、ニートは働くことにもコツが要り、コツを覚えなければ海で溺れると思っているのだ。

三番目の要因は、親でもなく教師でもない、見知らぬ大人が若者たちの目の前に出現しなくなっていることである。もちろん、雑踏にもまれている単なる見知らぬ大人ではない。若者たちと交流することのできる魅力的な大人でなくてはならない。

「リストラされた人がカウンセリングを受けると、『あなたはどのような仕事をしてきましたか。自分の言葉で4行から5行で書いてみてください』と言われる。すぐ書けそうな気がするじゃないですか。たとえば『〇〇銀行でこんな仕事をしていました』ぐらいは書ける。だけど、『あなたはそこで何をして、何に対してささやかな誇りを持って仕事をしてきましたか』と問われると、これが書けない。

僕は自分自身や仕事に対して、小さくてもいいから誇りを持って4、5行を書ける人生こそ幸せだと思うんです。そういう大人が、3割くらい世の中にいれば、ニートなどの問題は少しずつ解決すると思いますよ。」

玄田氏のこの発言に対する感想は、「そういう大人が、3割くらい世の中にいれば」、そもそもニートなどの若者が生じることもありえないだろうに、というもののだが、彼はまたこういう。「知らない大人が面倒を見て、知らない大人から注意されるのがいい。実はニート問題を解決する鍵が、この『他人』のなかにある。／大事なのが、英語で言うウィーク・タイズ(Weak Ties)、『緩やかな他人とのつながり』。社会のなかで生きていくには、これを持っている人間が強い。たとえば転職は、たまに会う人のネットワークをたくさん持っている人のほうがうまくいく。」

宮台真司のいう「面白そうに生きている人」が想起されるが、ニートが出現したり、増大するのは、「面白そうに生きている人」がほとんど見当たらず、「つまらない」大人が増大していることと密接に関連している筈だ。自分もあのような人になってみたいという気持を若者に少しでも抱かせるような大人が現れてくるかどうかであり、だから、「ニートの問題は大人の問題なんです。国土も資源もないこの国で、人を育てることを放棄したらアウト。90年代、『即戦力が必要だ』と言い過ぎたんですよ」と玄田氏はいう。それは単に、「人を育てることを放棄した」大人の責任ということばかりを意味

するものではない。なぜなら、「人を育てること」のなかには大人自身も含まれている筈であり、若者と共に自分自身を育てることを放棄した大人たちのなかに拡がっている荒地からニートが現れてきたという問題であるだろうからだ。

もしかすると、いや、たぶんそうだと思われるが、フリーターにしてもニートにしても、ひきこもりにしても、またリストカットにしても、すべて若者たちにあらわれている事態は、成熟社会で右往左往している大人たちの対応しきれぬ戸惑いがそれぞれに拡大されたかたちをとったものといえるのではないか。リストラされた大人がフリーターやニートやひきこもりに陥っていきたくなくなる気分が一時的にではなく、恒常的に社会に蔓延しはじめたとき、その気分が若者ちに感染し、フリーターやニートやひきこもりのかたちをとり始めたとみられる。若者たちは先行する大人たちの働くことに対する気分を敏感に察知して、目にみえる態度としてあらわすことに躊躇する大人に成り代わって、行動していたのではなかったか。社会に漂う気分^{ちゅうちよ}に浸透されるのは、さまざまな制約の多い大人であるよりも、制約の少ない若者であるのは明白である。

6月21日午前の閣議で報告された平成17年版「青少年の現状と施策」(青少年白書)には、ニートやフリーターの増加を憂慮して内閣府が初めて実施した「青少年の社会的自立に関する意識調査」の結果も掲載された。調査は今年1月から2月にかけて、満15歳から満29歳までの青少年とその親、それぞれ7500人を対象に実施し、有効回答率は青少年54.5%、親54.4%だった。05.6.21付産経では、次のように分析されている。

それによると、親の52.6%が子供に「多少希望と違う仕事であっても働いてほしい」と望み、「希望の仕事があれば働いてほしい」(23.9%)と、子供の希望を尊重する層を大幅に上回った。

これに対し、青少年の52.9%が「希望の仕事があれば働きたい」と回答。「希望とは違う仕事でも働きたい」とした青少年は24.3%にとどまり、「とにかく定職についてほしい」と願う親心とは裏腹に、子供は「自分の希望を大切にしたい」との意識を優先していることをうかがわせる。

また、自分の父親や母親の人生について「生きがいのあるものだ」と感じている青少年は16%前後と6人に1人にとどまった。

このほか、青少年が抱く親の印象に関して、「自分に優しく温かい」との回答は、母親50.3%に対し、父親は46.2%。「自分のことをよくわかっている」のは、母親が49.7%だったが、父親は29.5%にすぎず、子供と父親との「距離」が、浮き彫りになった。》

この調査によれば、親の半数以上が子供に「多少希望とは違う仕事であっても働いてほしい」と望むのに対し、青少年の半数以上が「希望の仕事があれば働きたい」と回答している。また親の1/4弱が「希望の仕事があれば働いてほしい」と、子供の希望を尊重しており、子どもの1/4弱が「希望とは違う仕事でも働きたい」と思っている。親が

「とにかく定職についてほしい」と願うのは、自分たちの世代がそうしてきたように、生活の面で独り立ちしてほしいと思っているからだ。ここでは親の考えは、独り立ちすることのほうが「希望の仕事」を上回っている。ところが、「希望の仕事」を願う子供の考えは、独り立ちすることよりも「希望の仕事」のほうが上回っている。独り立ちすることと「希望の仕事」とがこの調査では対立しているようにみえるが、そうではない。親の世代が独り立ちすることを優先させたのは、なによりもまず独り立ちしなかったというかつての自分たちの希望が強かったからだ。独り立ちするためには働かねばならなかったから、「希望の仕事」でなくても我慢ができたのである。

おそらく子供が「希望の仕事」を願うのは、独り立ちすることへの希望が低いことを浮き彫りにしている。独り立ちする必要性に迫られているわけではないから、焦って「希望とは違う仕事」に就かなくてもよいということだと思われる。つまり、はっきりとした「希望の仕事」への欲求が強いということではなく、独り立ちしなくてもいいから漠然とした「希望の仕事」が淡く口にされているという印象を受ける。したがって「希望の仕事」が、独り立ちしなくてもよい現状維持の口実になってしまっている感があるのだ。その証拠に「希望の仕事」の具体的な中身を訊いても判然としないだろうし、だいいち「希望の仕事」へのこだわりが強いのであれば、その目標実現にむかってなんらかの働きかけなり努力を積み重ねる必要があるのに、そんな動きもないところに、「希望の仕事」が子供にとってほとんど現実的ではありえないことが見て取れる。

自分に対して否定的である若者は、自分が働くことに対しても否定的なのである。「希望の仕事」などどこにもないことを知りながら、否定的な「働くこと」にむかって自分を押しだしたくないために、全く現実的ではありえない「希望の仕事」を夢うつつの気分で口にしているような気がする。どうして若者は働くことに否定的であるのか。先の調査では、《自分の父親や母親の人生について「生きがいのあるものだ」と感じている青少年は16%前後と6人に1人にとどまった》となっているが、そこに自分の父親や母親が仕事に生きがいを感じていない様子を若者が感じ取っていることが読み取れる。調査で浮かび上がってくる《子供と父親との`距離`》とは、そのまま子供と社会との`距離`であり、子供と働くことの`距離`を象徴していたにちがいない。

斎藤環は日本に特有の現象とみなされてきた「ひきこもり」が韓国でも急増中であることについて、そこに共通するのは「儒教文化」とであると主張する。《「孝」すなわち「親孝行」を、人間の行動の最高原理とする儒教文化は、すなわち「同居文化」であり、この点で日韓は共通している。同居文化とは、成人の「自立」を「一人前になって親孝行すること」というモデルで考える社会である。言い換えるなら、西欧社会のように、「自立」を家から出ることとは考えないのだ。だからこそ「四世同堂」「養児防老」などの言葉が、家庭の理想的あり方となる》と04・11・15付産経で説き、このような文化的背景の上に成熟社会の要件が加わって、「ひきこもり」が増大しつつあることを注視する。

《第一に欠かせないのは、経済的インフラである。成熟した社会とは、まず何よりも、「子供が労働を免れる社会」にほかならない。成人した子供が就労しなくても、とりあえず食べさせられる程度に社会が豊かにならなければ、ひきこもりは成立しないだろう。

少子化と核家族化がこの傾向に拍車を掛ける。少子化とともに子供はいっそう大切にされ、通過儀礼の消滅は「親離れ」「子離れ」のタイミングをいっそう曖昧化してしまう。それでなくとも子供の成熟を否認する親がいかに多いかは、子が30代になっても「ウチの子」「～ちゃん」呼ばわりする母親が珍しくない事実からもうかがえる。》

若者が口にする「希望の仕事」がほとんどリアリティーをもたず、むしろ「希望の仕事」が見つかるまで働かなくてもいい成熟社会の現実を享受しようとする若者の虫のいい都合ぶりが、先の調査から浮かび上がってきたが、そのことが「ひきこもり」の成立条件にもなっていることが斎藤環によって指摘されている。では、「ひきこもり」がもはやひきこもることができず、「ニート」が否応なしに働かざるをえなくするために、この条件を強制的になくしてしまつて若者を家から放り出し、「親離れ」「子離れ」を強制実行してしまえばよいのだろうか。そうすると成熟社会で若者は依存する関係がなくなって、独り立ちするようになり、個人の成熟にむかって足を一步踏み出すことになるのだろうか。斎藤環は、04・11・22付産経で、その考えに対してこう述べる。

《「ひきこもり」が日本や韓国のように、近代化の過程にある儒教文化圏に増加しつつあるとするなら、近代化が徹底されれば問題は解決するのだろうか。必ずしもそうとは言えない。家から追い出してでも個人の自立を尊重しようとする「近代的」な西欧社会が無条件に素晴らしいわけではない。そうした社会でドロップアウトした若者の存在は、たとえばヤングホームレスの急増として現れる。

これは若者が自立に失敗してホームレスになるというばかりではない。例えば「自立した女性」が離婚や再婚を繰り返した結果、息子が家に居られなくなるというケースもある。子供よりも親が大事と考えるのは単なる価値観の相違だから、それを批判したいわけではない。ただ、いかなる不適応も生じない価値観ないし文化は存在しない、と言いたいのだ。》

若者の自立を促すために家から追い出したからといって、自立に成功するわけではないのは、自立できる要因が彼らの内部につくりだされていないからだ。自立せざるをえなくなる環境に放り込まれることと、自立するようになることとの間には、千里の^{けいてい}径庭が存在している。そのはるかな隔たりのなかで運のよい者は自立に成功し、運の悪い者は自立に失敗するということではない。運の良し悪しではなく、ひきこもりやニートが家から追い出されて、自立に成功するよりも自立に失敗する確率が高いと思われるのは、彼らに特有の「非社会性」が彼らを社会的な自立の方向へ足を向けさせるようになることは考えられないからだ。

《進化生物学者の長谷川真理子氏によれば、日本の若者は、世界で最も人を殺さない若者なのだという。20代の若者の犯罪率が相対的に低いのは、欧米にもアジアにもない

日本特有の現象だ。法務省発行の2002年版犯罪白書でも、若者の暴行・傷害・強姦などが激減しており、総じて暴力犯罪のエネルギーが少なくなっているらしい》と斎藤環は指摘しているが、若者の反社会的傾向が低下しているのは、《社会全体のためには良いことだ》としても、若者の非社会的傾向の増大において《社会全体のために良いことだ》とけっしていえるものではないこともはっきりしている。ひきこもりやニートは「若者の非社会性」を窮極のかたちで浮き彫りにしているが、いうまでもなくひきこもりは別にして、非就労・非就学のニートは必ずしも非社会的傾向に流れるとは限っていない。反社会的傾向に突き進むことも十分予想される。「ニート」という言葉が生まれたイギリスでは、《十代の若者の「反社会的行為」が深刻化している》ことが報道（05・6・6付産経）されている。

《街角にたむろしての飲酒や喫煙はもちろん、建物への落書き、他人への暴力など、傍若無人な振る舞いはエスカレートするばかり。三期目に入ったブレア政権は「ヨブ（不良）」と称されるこれらの若者対策を最優先課題の一つに据え、規則強化や教育改革を検討するなど、秩序回復に躍起だ。

フードに帽子という、監視カメラから顔を隠す「実用性」も備えたファッションに身を固めた「ヨブ」。一説では百数十年ほど前に「BOY（男子）」を逆にして「YOB（ヨブ）」と読んだのが始まりとされるが、ここ数年、女子も含めた「ヨブ」が英全土で急速に増殖している。中年男性に集団で暴行を加え殺害したり、葬式の列に板を投げ込んだりと行動は一段と過激化、たびたび犯罪にまで発展する。

内務省の統計によると、「反社会的行為」で法廷が処分を言い渡したケースは2002年以降うなぎ上り。04年7 - 9月は730件と、02年7 - 9月（94件）の8倍近くに達した。最近では、大手ショッピングモールがモール内でのフードと帽子の着用を禁止するなど、対策も取られ初めている。ブレア首相は、他人を思いやり、社会のルールを順守するかつての秩序の回復を強く訴え、荒廃する街角や学校の立て直しを目指す。しかし、「若者（の行動）は大人の態度を反映している」との指摘もあるだけに、問題は簡単には解決できそうもない。》

この記事の中の「ヨブ」と称されるイギリスの若者たちの粗暴な振舞いは、日本の「若者の非社会性」が追い詰められ、糾弾された挙げ句の反転された攻撃性であるかもしれない。親の高齢化や収入の減少によって、ひきこもりやニートがいまの状態を維持しつづけることが困難になってきている。親が無理矢理家から追い出そうとしなくても、刻一刻と彼らは自分の喉元に押し迫りつつある^{きょうおん} 聲音に耳を傾けているにちがいない。彼らが依存できなくなって、いよいよ家から出なければならなくなったとき、彼らの自立が上手いかなければ、《ヤングホームレスの急増として現れる》ことになるのか、あるいはイギリスでの反社会的傾向の強い「ヨブ」のような若者のかたちをとることになるかもしれない。少なくとも彼らが自分たちにあらわれている問題を社会の^{せい}所為とみなしはじめたとき、彼らの怒りは社会へ向かうことになるだろう。その契機は、成熟社会が

個人を成熟しないように抑圧することへのまなざしを世間が含まずに、彼らを追い詰めていったときにやってくると思われる。

たとえば、曽野綾子が05・6・21付産経の「正論」で、「自らの力なくして心の傷は癒せず」と諭すように主張していることなどは、誰もが感じている一種の正論であるだけに、その正論が社会のなかで勢いを持ちはじめたとき、ひ弱な若者は強くなっていくよりも、一層ひ弱さに拍車を掛けて転げ落ちていきそうな気がする。

《列車の事故や学校の惨劇、あるいは自然災害などが起きる度に、最近の生徒や被害者の多数は、事件のショックから立ち直れず、セラピストによる治療を受けなければならなくなっているという。

私自身、子供のとき、何度も東京の空襲を体験して、死の危険を味わった。そのために一時軽い砲弾恐怖症になり、ものを言わなくなった、と母は後年話してくれたが、私にはその期間がどれだけ続いたのか、自分ではほとんど記憶していない。》

彼女の主張は冒頭からこう始まるように、心の傷というものは所詮自分一人の力で癒すほかないにもかかわらず、今の社会ではそのことを初めから放棄して、《セラピストによる治療を受けなければならなくなっている》、なんとひ弱な社会、ひ弱な個人になってしまったのだらうという慨嘆がそこから聞こえてくる。だから、《自らの心の傷は基本的には自分で舐めて治す、という習慣を忘れると、すべての傷はことごとく他者の力を借りないと治らなくなる。「大変でしょう」と言ってくれる人が配備されると、症状はより深くひどく、いつまでも続くことがある》と繰り返して、「忘れられた野性的気概の大切さ」なるものを説くことになる。その通りである。異論はない。ただし、なぜそのことが「忘れられた」のか、ということへの問いが忘れられなければ、だ。

貧困社会では、「野性的気概」というものを持たなければ生きていけなかった。成熟社会になるということは、もはや貧困社会に不可欠だった「野性的気概」を持たなくても生きていけるということである。したがって被害者が、《事件のショックから立ち直れず、セラピストによる治療を受け》るようになったことが、日本が成熟社会になったことのなによりの証であるのだ。曽野氏には、成熟社会では個人が成熟しなくても済ませられる、という根本的な点が踏まえられていないから、ひ弱な社会や個人にむかってどうしても、もっと強く自立せよ、としかいえないのである。すでに十分ひ弱になって自分の足で歩くことに不安を覚えている若者にむかって、年長者が自分たちがかつて子供の頃に持っていた「野性的気概」を持て、と主張することがなんの効力もないどころか、単に若者にプレッシャーを与えるだけにすぎないことに鈍感になってしまっているのだ。成熟社会の中の貧困化が進むようになると、ひ弱な若者にむかって曽野氏のような無理な叱咤激励が強まり、若者はますます追い詰められていくにちがいないが、彼らが何度もやり直すことのできる場所を我々が社会のなかに用意できるかどうか、ひきこもりでもニートでもない我々に問われているのだらう。

2005年6月24日記

